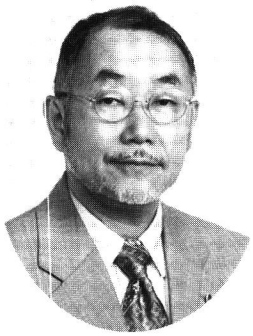

発刊に寄せて

静岡赤十字病院院長
行　木　英　生

平成14年版の静岡赤十字病院研究報が発刊されました．内容はどうでありましょうか．病院の研究報としての形態を新しくしてから，早や3年になります．英文抄録や著者の顔写真の掲載，そして診療部長による査読が開始されて，一応の形は整いましたので，あとは内容であります．

病院研究報の内容に関しましては，各病院ともそれぞれ独自性を発揮しておりますが，当院における今年の研究報の内容から，研究報の今後のあり方を考えてみたいと思います．

病院研究報の多くは，先ず，日常の業務の中で経験した症例を報告することや，永年積み重ねてきた研究業績を一年間のまとめとして報告するものとして，医局が中心となって行うものです．当院の研究報も内容の多くは医局からの報告が主であり，十分な紙面を使っての論文は著者の人となりも伝わってきて，読者の興味を引き，理解を助けるものでありますが，学会誌と太刀打ちできる内容にするにはかなりの努力を必要とするものもあります．しかし，論文はその著者のある時点での存在を永久に後世に残すものでありますから，病院研究報と言えども少なくとも論文の形態をなしていなければなりません．そのような立派な論文に加えて，病院報に院内各部門からの活動報告が論文形式で発表される本数が多くなれば，病院の特徴が最も端的に示されることになり，さらに，それが文献として引用されるものとなれば，それは立派な研究報と言えるでしょう．

今年の院内の勉強会では毎回すばらしい内容の発表がされていましだが，それを紙上発表するとなると，文章を書きなれない人にとっては，なかなか論文形式とならずに，報告しにくいものであります．特に医師以外の職種の人にとっては，論文を書く機会が少ない場合にはなおさらでありましょう．しかし，一回論文を書いてみると，次は要領を得て書きやすくなるものです．一人一人努力してみようではありませんか．

今年のノーベル化学賞には島津製作所フェローの田中耕一さんが選ばれ，大学人でない点が話題となりました．すばらしい発想も，長年の努力も，論文として記録に残っていないと，人の目に触れることはなく取り上げられることもありません．この快挙は私たち一般の日本人が忘れかけていた多くのことを思い起こさせてくれました．医療人である私たちも日常の臨床を通して，たくさんの新しい発想を記録にとどめる習慣を身に付けようではありませんか．

平成14年　師走